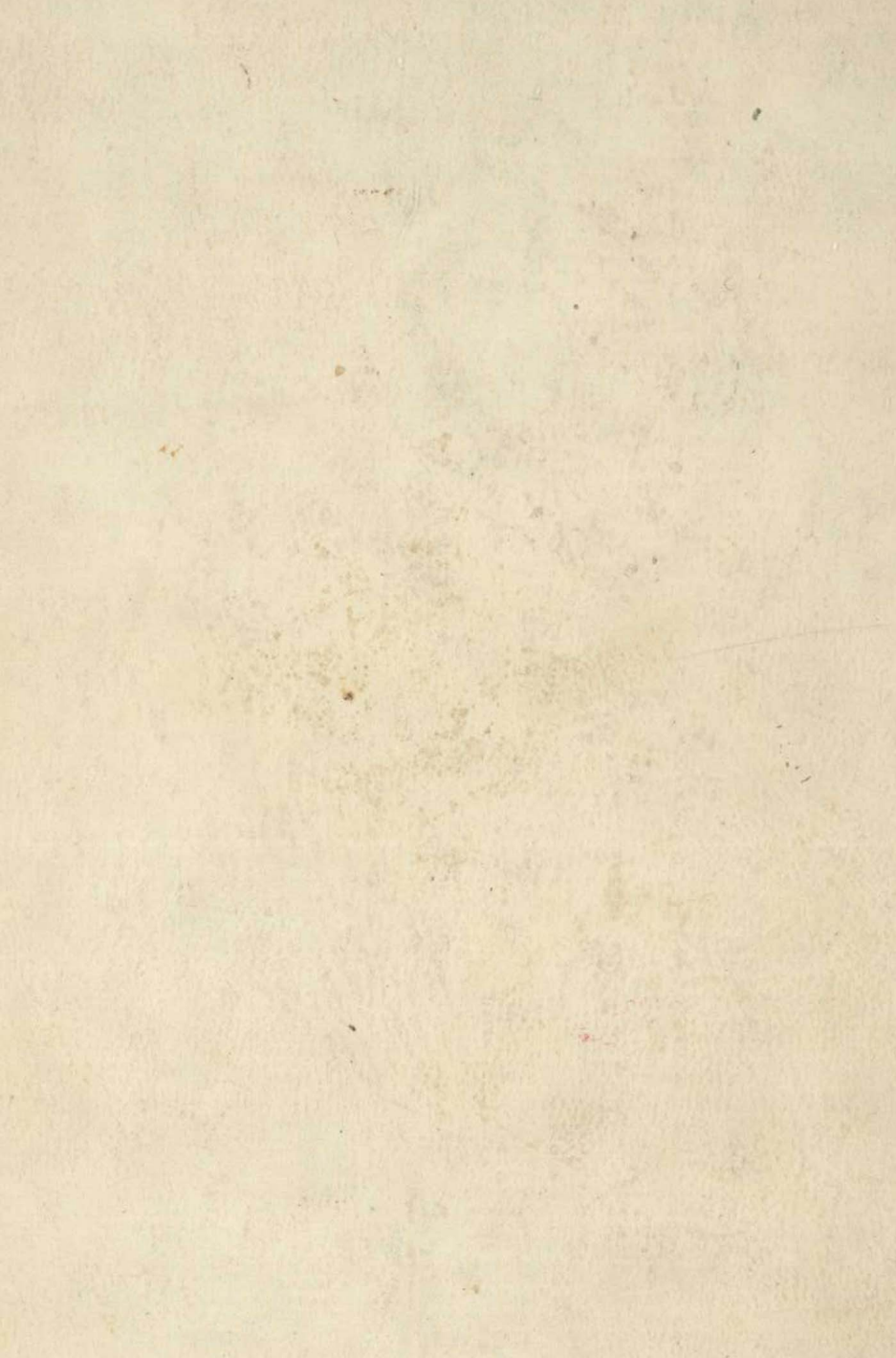




黒井千次 夢のいた場所

文藝春秋

夢のいた場所

昭和四十八年四月二十五日 第一刷

著者 黒井千次

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号 一〇二

電話 東京(〇三)二六五局一二一一

振替 東京七八七四三

印刷 精興社

製本 加藤製本

定価 七五〇円

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

夢のいた場所

アート・ディレクター 栗屋 充
フォトグラファー 石井正彦

一

最初の一群の男達が「月光閣」と書かれた大きな木札の下がった門から中庭にはいつて来るのは、新聞配達達の少年が夕刊を配りに来るのと同じ頃である。男達は、二階建の家屋に三方から抱きこまれた中庭に足をいれると、急に魚の群れのように動きを揃えて建物の内ぶとところにあたる玄関へと進んでいく。今さしこまれたばかりの新聞を玄関脇の状差しの自分の枠からひき抜き、そのまま歩みもゆるめずに両開きのドアを押して彼等は暗い屋内に吸いこまれていく。

急に靴音が大きくはね返る薄暗い玄関の正面には、表面がくろずんでしまった横長の大きな鏡がかけられている。前を通過する帰宅者達の姿は、薄暗がりに溶けた鏡の奥からゆ

つくりと浮上する。やあ、帰って来たな、お前——。濁った水溜りの底から斜めに自分の像が浮き上って来るのに出会うと、コンクリートの通路の上でようやく彼等の足は遅くなる。

二年前、和夫が黒いスーツケースをさげて初めて月光閣の玄関にはいった時も、鏡はそこにひっそりと身を埋めていた。その時、ギャバジンの紺のコートを身につけ、髪をきっちりとし七三に分けて緊張した表情の瘦せた若い男に、和夫はこの鏡の中で出会った筈だった。あの時から、鏡は更に見えにくくなっていくだろうか。木の枠にそった部分には裏側の朱の色ののぞけた不定形の汚れが幾つもひろがり、そこから中心部に向けて大小様々の染みがさざ波のように表面をおおっている。床屋の鏡を三、四枚横につなげたほどもあるその古めかしい鏡が、いつから玄関正面の壁面にすえられているのか、先輩の入居者にきいてもわからない。寮母の布川ハツエにたずねても、さあ、わたしが来た時はもうあったみたいよ、という返事がかえって来るだけだった。何カ月かここで生活すると、しかし住人にとってその古びた鏡はなくてはならぬものとなるらしかった。誰も見てはいないよう
でいて、月光閣の住人の誰もが間違ひなくその鏡の中の自分とひそかにつきあい始めている。畜生、少し疲れているみたいだな。このネクタイはわりといいじゃないか。そろそろ床屋にいく頃か……。少なくとも、鏡は、玄関のドアから荒々しくはいつてくる空腹を抱

えた男達の足どりを一瞬ゆるめさせ、彼等をそつと食堂に導くというほどの役目は立派に果していた。

食堂に一步踏みこんだ瞬間、来ているな、と和夫は感じた。何か白いものが視界の端からひらひらと自分に合図を送っている。しっかり見きわめたわけでもないのに、部屋の右手奥にある郵便物の状差しが身体のすぐ横に感じられてしまうのだ。ニス塗りのポケットの自分の名札の縁からのぞいている郵便物の丈からみて、それが一枚の葉書であること、男じみた大きな字が、吹き降りの雨のように斜め右にかしぎながら並んでいること、そして、その内容が自分には好ましいものではないことまで、和夫は一気に理解してしまう。いや、理解というより、肉体が勝手に認めてしまうのだ。そう思っていた方がいい。それに、どんな便りであっても、何も来ないよりはましではないか。

つとめて何気なさそうに手をのばして状差しの葉書を抜きとると、ちらりと片面を見ただけで和夫はそれを服のポケットに滑りこませた。宛名の大きな字と、緑色の国会議事堂の印刷された楕円にかけての無造作な日付の書きこみ方からして、その発信人は疑いようもない。

食事が納められている網戸棚は状差しとは反対の左手奥だから、郵便物をとった者はテーブルにそつて部屋をほぼ一巡することになる。網戸をあけ、自分の名前が貼られている

棚から、井につけられた飯と、小さな卵二個を使ったハムエッグの皿、大根の切干しと油揚げの煮付を盛った小鉢を下ろす。吸物はテーブルに置かれた大きな鍋から各自がよそうことになっているのだが、よほどタイミングよく帰って来ない限りは熱いおつゆにありつくことなど出来ない。光熱費、設備費を会社が負担しているとはいえ、食費は一日百円なのだから、飯は十分もあれば食い終ってしまうほどに簡素なものだ。

和夫がその飯を半分ほど食った時、早くも自分の飯を食い終った峯村政吉が湯呑茶碗をもって横の席に坐りこんだ。同期に入社し、同じ日に月光閣に辿り着き、その時必要最少限の日用品を買いに連れ立って街へも出たのだから、和夫にとっては寮の中で最も古く親しい友人の一人と言えた。最初の買物に行った時、荒物屋でも、薬屋でも、文房具屋でも、和夫は峯村の買う物がすべて自分の買い物より一まわりか二まわり大きいものであるのを知って驚いた。洗面器も、歯磨のチューブも、インクの瓶も、峯村が選ぶものは和夫が手にとるものの兄貴分の大きさであり、二人の買物が一致したのは家具屋で求めた坐机だけであった。峯村というこの骨組のがっしりした男が自分の買物を見て、なんとどこんまりしたみみっちい男だと感じているのではないかと想像して和夫は落着きが悪かった。

大きな音を立てて茶をすすると、峯村は急に顔を近づけてきた。

——お前、立石さんからの話、きいたか。

立石さんの、ときき返すと峯村はあわてて食卓のまわりをうかがった。テーブルにひろげた夕刊に首を突っこむようにして、四、五人の男達がばらばらに席をとり食事を続けている。

——八時になったら、立石さんの部屋に集まってほしいってよ。

峯村としては珍しく慎重に声をひそめている。

——全員か？

——ばか。学卒だけだ。

それをきいて和夫は峯村の挙動を理解することが出来た。今日、定時で退社して来た中では大学出は彼等二人だけであり、今周囲で食事を続けているのはいずれも彼等より若い高校卒業者達だったからだ。八時からか、と呟きながら和夫は二つ目の小さな卵に箸をつき立てた。冷たくそり返ってしまった薄い機械切りのハムの上で、焼き過ぎた卵は着色されたかのように黄色く固まっている。渋っている和夫を見ると、峯村は何か予定があるのか、と反問して来た。何かあるとは言えないだろう。しかし、何も無いとも言切れない。ポケットの中の葉書をゆっくりと読んでみなければなんとも言えないのだ。長くはかからないだろうからとにかく顔だけは出すように、と念を押してから、峯村は湯呑茶碗に残った茶をコンクリートの床に乱暴に捨て、一段と低い炊事場に降りて行く。おや、峯さん妙

にはやいじゃない、という寮母の布川ハツエの声が起り、峯村のよくはきこえない受け答えにハツエが例の馬鹿笑いを噴きあげるのがきこえて来る。

二番目の帰寮者達がまた一群をなして月光閣にもどって来るのは、最初のグループが帰り着いてからちょうど一時間後である。そして三番目の組が帰り着くのは、それから更に一時間の後となる。会社を出るのが一時間ごとに区切られているのだし、どこへ寄り道しようにも関東平野の西北端に近いこの小さな街にはあまり面白いところもないのだから、男達が帰宅する時刻も自然に退社時刻に対応してほぼ一時間ビッチとなってしまう。

しかし帰寮者達がそのようにまとまって帰って来るのは、二時間残業か、せいぜい三時間残業までであり、その後はもう全くばらばらで何時になるのか見当もつかない。この街に面白いところがあるにせよないにせよ、とにかくどこかにまぎれこんで、玄関のドアがしめられる頃にならなければ帰って来ない連中がいるのも事実なのである。

食事がすんだ男達は、一休みすると年相応の速さで元氣をとりもどし、コの字形に展開する建物の上下左右、あちこちの部屋に「ケー セラー セラー」などと大きな歌声の尾をひきながら散っていく。つまり、ようやく一人一人が別々の時間の中にはいりこんでいくわけである。

スリッパにはきかえ、脱いだ靴を手にさげて、和夫は軋む木の階段をうつむきがちにの

ぼった。ほの暗い二階の廊下のつき当りにある非常口のあたりに、まだ暮れ残っている外の明るみがかすかに滲んでいる。そこをめがけて歩いていくと、戸外の明るみは強くなるのではなく、どんどん遠のいて逆に廊下の薄暗がりに溶けてしまうように思われる。

〈三十九号室・小早川和夫〉——月光閣の門をはいってから何度目かに自分の名前に向き合った時、彼はその木札のはめられたドアの向こうにやっと自分の空間を見出すことになる。一度目、玄關脇の新聞受け、〈小早川〉、昭和三十一年三月某日付けの朝日新聞夕刊を手にする。二度目、食堂の状差し、〈小早川〉、五円の官製葉書、かくれるようにしてそれをポケットにしまいこむ。三度目、〈小早川〉、網戸の中の井と皿に手をのばす。そして四度目、〈小早川和夫〉、手さぐりで鍵をはずしたドアをそっと手前にひく。

と、闇の中からいきなり寄り寄って和夫の身体を押し包んでしまうものがある。ああ、まだ生きているな。暗くて見えないためか、一層ふくらんで感じられる匂いの中に彼は静かに身をひたす。その香りは、決して三十九号室の留守を守っていたのでもなければ、そこに嚴重に閉じこめられていたのでもない。ちょうど部屋の重心のあたりに、天井から細い紐で吊られた一個のりんごが垂れ下がり、それが闇の中で気ままな皮膚呼吸をしていたに過ぎないのだ。

ある日、会社からもどった和夫がドアをあけた時、いつもと違う何かが部屋の中に動い

ているのを感じた。前日買ったまま食い残して本箱の上に転がしておいたりんごの精気が、しめきられた部屋の澱んだ空気の中にそっと漂い出したらしかった。おそらくは国光と呼ばれる高価でも貴重でもない平凡な一個の果実が、今、ささやかな自己主張を始めているのだ、と和夫は思った。

りんごが爽やかな香りを放っている以上、それは呼吸をしているに違いない、と彼は思いついた。少しでも楽に、少しでも長く呼吸を続けさせてやるためには、果実を空中に放ってやること、自然の状態にもどしてやるのが好ましいに違いない。そう考えて短いへたに紐を結びつけようとした時、食うためにではなく指に触れたりんごのひやりとした感触が、少女の腿の肌ざわりを思わせることに彼は驚いた。そして果実の薄黄色の皮膚に鬱血したように滲んでいる赤い色を近々と見た時、和夫が思わず自分の中に呼び起してしまったのは、冬の日の八木英子の太腿に現れるあの無数の赤紫の血管の姿態であった。ほら、こんなになるの、どうしてかしら……。声をひそめて英子が言った。あれは、彼女の家の炬燵の中でだったろうか、それとも、人気の少ない夕暮の喫茶店のいつもの一番奥の席でだったか……。和夫は軽い興奮を覚えながら、置き炬燵のやぐらの上に乗って天井の棧に横から折釘をねじこんだ。意外な重さを伝えてくる薄緑色の紐の端を折釘にかけ、国旗でも掲揚する手つきで彼は果実を部屋の中心近くに吊りあげたのだった。

和夫の抱いた思いがりんごに伝わったとは思えない。しかし、長い紐の先で六畳間の中央にゆるく揺れるようになってから、その果実が前にもまして強い香りを放ち始めたのは確かなことだった。

どのくらいの日数が経ったのであろうか。ある日、和夫は吊り下げられたりんごの上に微かな腐敗の徴候を見た。その時から、彼の内部で、りんごと自分とが微妙に重なり始めていた。このまま放置され続けるならば、最後にりんごはどうなるのだらう、という興味が和夫を捉えて離さなかった。砂時計や日時計、水時計と並んで、腐り時計という考えが彼に生れた。時の長さが、生命の根元を絶たれた有機物の、腐敗に至る迄の時間を単位にしてはかられるとしたら……。会計課の園部佳子は正確にヘリンゴの周期で生理休暇をとるが、その休暇日数は労働協約の定めるとおり「ヘイワシ」である。又は、先期の経費分析作業の所要日数は「ヘイトミミズ」を目標とし、出来ることならば「ヘニギリメシ」で完成すること……。和夫の奇妙な想念の中には、なぜか「コバヤカワカズオ」という名の時間は浮かんで来なかった。もしそれに正面から向き合ねばならぬとしたら、彼はその特別な時間をあまりに長く定めてしまうか、不当に短く設定してしまうかのどちらかであつたろう。

闇の中にカーテンでおおわれた西向きの窓がぼんやりと浮き上がっている。そこからの

びこむ僅かな光が、次第に暗さに慣れてくる目に室内の模様を鈍く押しつけてくる。足もとに敷かれたままの湿っぽいふとんも、窓辺に置かれた小さな坐机も、去年風邪をひいたのがきっかけで煙草をやめたために空っぽの灰皿も、本箱の上のクリーム色のラジオも、なにもかも今朝出た時のままであるのは見なくともわかつている。もし何か変っているものがあるとしたら、それは滲んだ影絵のように部屋中央にぶら下がっているりんごでしかないだろう。明りもつけずに和夫は腰をかがめてりんごに鼻を押しつけていく。ただいま・ただいま・ただいま・ただいま……。意外に肉感的な柔らかさとひやりとした肌ざわりでそれは彼の鼻を押し返す。まるで、よく知りつくした一つの鼻と部屋を中心部で出会った感じだ。唇と唇が触れ合う前の短い猶予の時間を、和夫はしばしばそうやったまま、次第に荒くなる英子の息の匂いを嗅ぎながら楽しんだ。湿った粘膜の放つ優しい匂いは和夫を捉え、和夫を刺し、彼の内部に狂おしく押し拡がってくる。その時のことを思い起すと、英子のややそり気味の大きな鼻が、他の何よりも欲望をそそるものとして息苦しくよみがえって来てしまう。その鼻の感触を苛立たしく味わい返すために、和夫は一枚の絵を描いたほどだった。真紅のクレパスでただ英子の鼻だけを彼は描いた。バックを黒で濃く塗り潰した。和夫の部屋にはいつて来た峯村が、壁に貼られているその絵を見てきたことがある。

——火の用心か、それとも何かがもう燃え出したのか？

その時和夫は目をつぶって笑ったまま答えなかった。

しかし今、自分の鼻を押し返そうとしながらも後退していくものの中に、和夫はふと白けたよそよそしさを感じた。英子の鼻がそんなふうにと和夫を離れていったことがあったからだ。風邪をひいているから、だめよ、と彼女は言った。それから突然陽気な声をあげ、神経を集中している彼の鼻を置き去りにしたまま、手にしたせんべいと一緒に知恵の輪を飲みこんでしまった飼犬の話に彼女は熱中してみせたのだった。どうしてもはずれなかった知恵の輪が、四日目の犬の糞の中に別々になって出て来たのだと彼女は笑い転げた。その話をきかされたのはまだあまり前のことではない。そして、ポケットの葉書は今日ついたのだ。

自分が何をやっているのか、急にわからなくなりました。このままでは、あなたにも悪いことをしているのかもしれない。時間をかけて考えてみたいのです。しばらく一人にさせておいて下さい。

東京は、今日、雨です。

英子

一瞬にして読み終えてしまった葉書を手にしたまま、和夫は部屋を暖めることも忘れていた。読むというより、男っぽい大きな字の列が、一つなかりに身体に流れこんだ感じだった。何が起ったのかははっきりしなかったが、それは彼の予想を上回る気がかりな便りだった。「東京は、今日、雨です」という最後の一行にだけ、英子の微かな体温が感じられた。それが感じられるだけに、その前の数行の言葉が気味の悪い冷たさをたたえていた。これから、すぐ東京に行こう、というのが最初に浮かんだ考えだった。枝だけの桑畑の中を延々と走るバスの夜道、冷たい風の吹くプラットフォーム、人気のない待合室、そして長旅の饑えた匂いのつまった長距離列車……。今夜のうちに上野に着き、終電車を利用して英子の家を訪れることは今からならまだ不可能ではない。その考えをおさえたのは、明日の勤務を思ったからでも、今夜の会合を氣にしたからでもない。「しばらく一人にさせておいて下さい」と書いた英子のもとに押しかけるのが、かえって事態を悪くしてしまうのではないか、と憂えたからだ。いや、本当は英子と向き合ってしまうのが怖かっただけなのかもしれない。上野駅の白く光る電気時計や、汽車の網棚に幾つも幾つものせられ